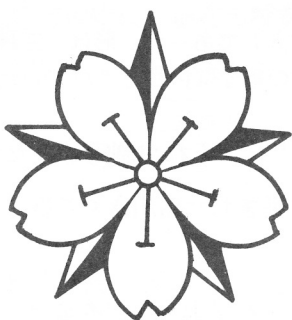


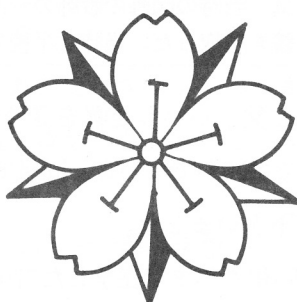
現 在

東京学芸大学附属竹早小学校

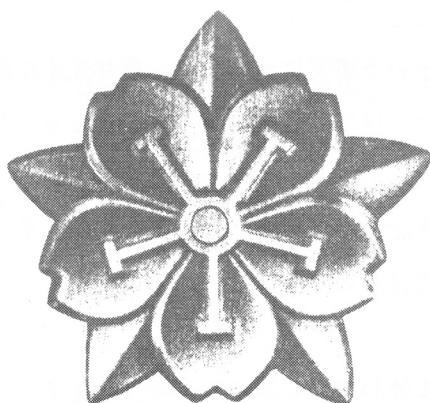
校章・バッジ（胸章）の由来聞き書き



大正14年卒業アルバム



昭和10年卒業アルバム



昭和33年度卒業アルバムより



現 副校長 柳 辰男記 平成元年10月6日

1. は女子師範と第二高女の校章であったが、いつ制定されたか、誰のデザインか？

谷秀夫氏の文章にもありますように、女子師範と第二高女の校章として制定されたものと思われる。

手元に資料がありませんが、昭和17年の女子師範のアルバムが一冊残っています。この図案の中央に  と書かれたものが表紙を飾っていきまして、卒業生の方は多くの証拠をお持ちだと思います。

また、府立第二高女については、都立竹早高等学校創立85周年記念に刊行された「竹早新しい歩み」(昭和60年11月2日)に、荒井和子先生(現 竹早高校教諭)が校章の由来という文章の中で、次のように書かれておられることから分かります。

校章の由来

明治33年、府立第二高女創設以来、生徒は綿服と袴姿であった。昭和4年、セーラー服を採用、同時に校章をつくった。

校章の図案は、当時の図画の教師の岩清水先生(故人)であった。形は、三種の神器の内の八咫の鏡を型取った。当時女学校では、鏡は女の重要な持物とされていた。

谷秀夫さんは、お父上がいつ委嘱を受けてデザインされ、それが制定されたかについて、ご自分の記憶だけでは確かでない、同級で第二高女に進まれた吉川きくこ様に確かめられ、次のような報告を下さいました。

- ① 大正13年～昭和4年まで在学した吉川きくこ様は、在学中バッジを着けたことがなかった。
- ② 昭和2年～7年まで在学した妹さんは途中から着けた。
- ③ 昭和6年に入学した下の妹さんは最初から着けた。

以上のことから、谷さんは昭和5年、6年の制定と推論されました。また、上記の荒井先生の記述にも矛盾することはないと思われます。

デザインの主が岩清水先生であるという事実については、荒井先生に直接電話で確かめましたところ、確かな資料があるわけではなく、古くからいらっしゃった、先輩の音楽の先生から聞いたことを書かれたのだそうです。

デザインの意味は、谷さんはあまり記憶がないということですが、荒井先生が先輩から聞いて書かれたことがあっているのではないのでしょうか。

2. 附属竹早小学校のバッジ、胸章として使われたのはいつであったか？

もちろん、谷さんの記事に出てくるはずがありません。

現在残っているアルバムを資料として見てみますと、昭和31(1956)年度卒の小学校と幼

稚園の卒業アルバムに記されたのが初出です。また、バッジそのものの姿は、昭和34年のアルバムに初めて見ることができます。昭和17年までのアルバムが残っておらず、調べることができません。

元副校長の前田（旧姓上田）京子先生の話しによりますと、そう古いことではないということです。次のような説明をされました。

男の子は帽子やボタンに校章が着いていて、どこの学校の子供かすぐわかるけれど、女の子はそれがないということでバッジを作ることになり、女子師範学校の校章の「女師」のところに、「附小」と入れたバッジをつくったのだそうです。その年や経過の確かなことは記憶がないとのことでした。

3. 竹早の校章は、「剣に桜」か「星に桜」か、また、上下は剣が上か、桜が上か？

昔の卒業生の方の中に、現在の校章に、何か自分の小学校時代と違うのではないかという思いをもたれていらっしゃる方がおられるようです。

上下が逆ではないか、大きさはもっと小さかったのではないか、剣が伸びすぎて青山師範の附属と同じになっているのではないか、剣に桜ではなくて、星に桜と教わったような気がする、等。

元副校長の鈴木勝男、前田京子先生の責任執筆された東京学芸大学20年史（昭和45年発行）に次のような記事があります。

校章は剣に桜を組み合わせた“剣桜”である。その制定は記録にのっていないのははっきりしない。剣は武をあらわし、桜は国花であることを思えば、誠に高潔、気宇雄大なよい図案を考えられたものと思う。

校旗は、朱地の上に校章を中央に配し、金糸のししゅうで浮きぼりにしている。この現在の校旗が作られたのは昭和14年である。

デザインとしては同じとされている附属世田谷小学校でも、明治32年頃制定されたようですが、正確な制定日、制定の由来等は資料がなくて不明であるとしています。しかし、百年史に明治38年附属小学校の訓導となられた武藤市蔵先生から聞いた話として次のような記事があります。

「当時の子供達は制服のようなものはなく、和服の着物を着ていましたが、確か男の子は帽子をかぶっていたように思います。その帽子には記章が着いていたと思いますが、それは師範の記章に桜を乗せたような形ではなかったかと思います。それがいつ決まったかは覚えていません。」

このことから考えますと、青山師範学校の校章は、五つの剣の穂先に三種の神器の鏡を中

央に配したものだったようですから、鏡の代わりに桜を乗せたのでしょうか。

世田谷小学校との違いですが、竹早は剣が少し短かったようです。それは今でも名残りととどめているように思います。大きさが少し小さかったと言う人がいらっしゃいますが、確かめることができません。では、「星は桜」は子供達の思い違いでしょうか。

このたびの同窓会誌9号4Pに偶然にも久世清先生が「けん桜ひかり輝く三伏の夏」と書いていらっしゃいます。また、昭和17年までに見られる剣の穂先の左半分には黒く陰影がつけられ、立体感を表わそうとしていることから星ではないことが分かります。

しかし、子供達の誤りとは片付けられなくなっております。世田谷小学校では運動会の歌に「胸に輝く世田谷の星と桜の」といった文言もあり、由来もそれに則った説明がされ、竹早にもその影響があります。

最後に残る大きな問題は記章の上下の向きです。

アルバムで見えますと、大正6年の一冊だけが現在の向きになっていて、昭和2, 3, 6, 8～17年と総てが現在と向きが反対になっています。おもしろいのは、昭和14年のアルバムでは、表紙は現在と逆になっていて、中の校旗の写真は現在の向きになっているのです。昭和31年以降は総て剣が上の形になっています。世田谷小学校も同じです。

なお、先にも書きましたように、昭和14年の校旗制定の時の校章は現在の形です。この校旗は、昭和24年東京学芸大学附属竹早小学校と改められた後、いつかははっきりはしませんが、高島屋で校名で縫い直され（元副校長植田正次先生に聞く）現在も使われています。この時どういう訳か附属の「附」が「付」になっています。

◇おわりに◇

この聞き書きを書くに際しては、谷秀夫さんにはもちろんのこと、旧職員の加藤富美子先生、植田正次先生、前田京子先生、それから都立竹早高等学校の荒井和子先生には、突然の電話に長時間おつきあいいただき、大変お世話になりました。

また、アルバムのコピー等では事務の高木さんの手を患わせました。

ここに、皆様にあらためてお礼申し上げます。

これをきっかけにして、母校竹早小学校に関しての歴史なり、エピソードなり、思い出なりがお寄せ頂けたら幸いです。